

1-4.海に暮らす生き物の観察会および勉強会の実施について

吉川 晟弘

YOSHIKAW AKIHIRO

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

International Center for Island Studies, Amami Station, Kagoshima University

「サンゴ礁のいきもの観察会」の実施

奄美大島に暮らす海の生物の多様性を地域の方々へ伝えるために「サンゴ礁のいきもの観察会」を実施した。この観察会は公益財団法人日本自然保護協会（以下、日本自然保護協会）とともに企画した。観察会の当日には、私が研究の対象としている海の底生動物についての解説を行い、かつ私のこれまでの研究成果なども紹介した。

観察会は、2023年9月16日に龍郷町赤尾木湾の海岸で開催した。開催するにあたり、2023年9月15日にあまみエフエム ヒマバンミショシーナ、イベント情報・お得情報および、エフエムたつごう「わん week たつごう～生放送～」にて観察会の宣伝を行った。その効果もあり、観察会には小学生およびその保護者を含む、合計18名が参加した。

観察会では、実際に海に出る前に、スタッフにより磯およびサンゴ礁を観察する際に注意すべき点や毒を持つ生物を見つけた際の対処法が説明された。その後、スタッフらが参加者を海岸へと誘導し、当センターが準備した採集具を用いて様々な動物を採集した（図1）。造礁性サンゴ類やシャコガイ類などの採集が困難な底生動物については、現地にて中野恵氏（日本自然保護協会）の指導のもとで観察した。

採集された動物を屋内に持ち帰り、図鑑を用いて種の名前を調べた。スタッフらは、採集された種およびその個体数を記録し、今後の生物相変遷を把握するためのデータとして蓄積した。観察会の終盤には、私が各動物の進化過程や特有の行動に関する知見を紹介し、参加者の海に暮らす動物の基礎的な生態の理解を深める手助けをした。その後、参加者全員で採集した全ての動物を海に返し、観察会を終了した。

本観察会については、観察会の翌日（2023年9月17日）に、南海日日新聞から「海の生き物に興味津々 龍郷町で観察会 リーフ歩き生態学ぶ」というタイトルの記事としても紹介された。



図1.「サンゴ礁のいきもの観察会」の様子

「奄美群島の渚のいきもの勉強会」の開催

これまで奄美群島では、海の生物に関わる研究者や活動家が交流するための機会が少なかった。そのため、生物の生息の有無や生息環境の所在など、お互いの活動にとって有益な情報が共有されておらず、各々の活動は、各個人やその所属団体がもつ知見の範囲内に制限されていた。そこで今回、鹿児島大学および、奄美海洋展示館、日本自然保護協会が協力し、各者が持つ知見を互いに共有するための場として「奄美群島の渚のいきもの勉強会」を開催し、各者の奄美群島内での活動範囲の拡大を目指した。同時にこれが、これまでの奄美群島で得られた研究成果や、教育活動の進捗を地域の人たちと共有するための場となることも期待した。

「奄美群島の渚のいきもの勉強会」(以下、勉強会)は、令和5年11月25日(土)の14:30~17:00に、奄美海洋展示館 シアタールームにて実施した(図2)。勉強会は、島嶼研奄美分室が発案し、奄美海洋展示館および日本自然保護協会とともに企画、運営、実施した。参加対象者は、奄美群島の海洋生物の自然史学に興味のある中学生以上一般の方とした。講演のタイトルは、筆者による「奄美に暮らすヤドカリの話」、高村洸介氏および小瀬村岳(奄美海洋展示館)による「島で出会った日本初記録の海洋生物」、および中野 恵(日本自然保護協会)による「もっと知りたいシマの海~奄美大島の海を調べるプロジェクト~」であった。会場は出入り自由という形式をとり、参加者が興味のある講演を選んで聞くことが出来るようにした。事前登録者は約30名にも及んだ。

勉強会の終了後には、登壇者らだけでなく参加者同士が名刺交換をしている情景も見られた上に、次の勉強会にてぜひ登壇したいという声も数多く寄せられた。このことから奄美群島内には他機関との交流を求めている方々が数多く活動していることがうかがえる。今回の勉強会が、奄美群島の海をフィールドとして活動している人たちの交流の場になったことを実感すると同時に、継続的に本勉強会を実施していく必要性を感じた。

本勉強会については、南海日日新聞および奄美新聞から、それぞれ「ヤドカリは「宿貸し」も 奄美市で渚のいきもの勉強会」および「鹿大島嶼研・海洋展示館「渚のいきもの勉強会」」というタイトルの記事として紹介されている。



図2.「奄美群島の渚のいきもの勉強会」の会場の様子